

ブロッコリーの苗立枯病（病原の追加）

平成28年6月に南幌町及び北広島市で定植1～1.5ヶ月後のブロッコリーで生育不良や萎れが発生した。発病株は地際部に腐敗が認められ罹病部からは単一の糸状菌が分離された。形態的特徴、温度別菌糸伸長程度、培養菌叢、及び亜群特異的PCR法に基づき、分離菌を *Rhizoctonia solani* Kühn AG-2-2 IV 及び AG-2-1・Subset1 と同定した。*R. solani* によるブロッコリーの病害は苗立枯病と株腐病があるが、ブロッコリーの生育時期や病原性によって異なる。そこでブロッコリーの生育時期別に分離菌の病原性を確認した。播種後3週間及び8週間の苗では萎れや枯死を含む病原性を示したが、播種後3ヶ月の株では地際部の腐敗は認められたものの萎凋症状を示さなかった。これらのことから本病は苗立枯病と判定した。*R. solani* AG-2-2 IV 及び *R. solani* AG-2-1・Subset1 とも苗立枯病の病原菌として未報告であるため、両菌を本病の病原として追加することを提案した。

（中央農試）